
15世紀末ペルシア・ティームール朝挿絵入り写本『鳥の言葉』(メトロポリタン美術館、Fletcher Fund,1963.210)の成り立ちについて

東京大学 鎌田 由美子

15世紀末、イスラーム時代のティームール朝ペルシアの都市ヘラート(現アフガニスタン)では宮廷文化が繁栄し、支配者が経営する書画院では、ペルシア芸術の粋を集めた挿絵入り写本が制作された。現在メトロポリタン美術館が所蔵するアッタール著『鳥の言葉』写本(所蔵番号 1963.210)もその一つである。この写本は、豪華に彩飾された本文ページと、ペルシア絵画の傑作とみなされる挿絵を含み、ティームール朝写本の代表作品とされている。本発表では、調査によって新たに判明した知見を述べ、合わせて、挿絵の場面選択と内容における、この写本の特殊性について考察する。

この写本の奥書によれば、写字が完了したのはヒジュラ暦 892 年 5 月(西暦 1487 年 4 月)で、挿絵の一枚にも同年の年記がある。挿絵のなかの建築物には、彩飾と共通する図案が用いられており、彩飾家も挿絵制作に関わっていたことがわかる。また、彩飾の様式に変化があることから、この写本は複数の彩飾家が制作に参加、大勢の彩飾家や画家が所属する書画院で制作されたことがわかる。一方、挿絵のなかには、着色の完成されていない部分があり、当時この写本が未完成だったことを示す。この写本は、その後、17世紀初めにサファヴィー朝君主アッバース 1 世の所有となった。彼は、欠落したフォリオの後補と装丁を宮廷書画院に命じ、写本としての体裁を整え、王朝の墓廟に納めた。

この写本についての従来の研究は、挿絵の様式的な分析を中心とし、挿絵と本文との関係についての十分な考察を欠いている。また、本文のフォリオを含む写本全体の詳しい調査も行なわれないまま、現存する 66 フォリオのうち、後補は、巻頭の彩飾見開きと 4 枚の挿絵だけとされてきた。

発表者が、2002 年と 2003 年に調査を行なった結果、さらに本文の 15 フォリオが後補であること、挿絵が描かれていたはずのフォリオが 1 枚脱落していることが新たにわかった。後補の彩飾と挿絵は仕上げに精確さを欠き、サファヴィー朝時代に、写本芸術がやや衰退したことと符合する。

また、調査の結果、この写本に本来描かれていた九つの場面が特定された。この写本を、現存する他の『鳥の言葉』写本と比較すると、挿絵を入れるべく選択された場面が例外的である。すなわち、この写本の場面選択においては、独自の、恐らくは注文主の意思が反映されていると見ることができる。他の『鳥の言葉』写本の挿絵が、本文の内容を忠実に絵画化しているのに対し、この写本の挿絵には、本文に言及のないモチーフや情景が描かれている。しかしこれらは、本文をよく読むと、隠された意味を感取できるように工夫されている。15世紀末ヘラートでは、支配者や有力者が文芸サークルを開催し、詩作における機知や技巧的な謎掛けが競われた。この写本は、未だに不明なペルシアの写本制作過程の一端を示している点、また、その挿絵が、注文主の意向と、当時の文芸の傾向を反映している点において、大きな意義を有している。